漱石『こころ』人間らしい生活

Junko Higasa

「先生」と「K」は幼馴染である。この同郷の優秀な二人の青年は、世の中に「人間らしい生活」をもたらすために、偉くなることを目標に、切磋琢磨して勉学に励んだ。

真宗の寺の次男であった「K」は、東京へ修行に出るための資金の関係で、姉の夫の親類である医者の家の養子となった。しかし宗教と哲学に興味を持っていた彼は、自分の理想とする「精進」の道を極めるために、医学部進学の条件を反故にして文学部に入学して仕送りを絶たれ、実の親とも絶縁状態となった。「先生」は融和を図ろうと双方の家に手紙を出したが無視された。K は、その後の様子を問う姉からの手紙にも「心配無用」と返信し続けたため、ついには義兄から「先生」宛に「様子を知らせてほしい」という手紙が届く。親の遺産で暮らす裕福な「先生」は、K の姉への好意と、自分を軽蔑したともとれる K の実家・養家への意地で、K を支えようと決意する。K は 1 年半独力で己を支えたが、この過度の労力が健康と精神に影響し始めた。それを見かねた「先生」は、K の強情を折り曲げるために彼の前に跪く発議までして、K に物質上最低限の「人間らしい生活」を提供するべく、自分の下宿に同居させた。また精神上の「人間らしい生活」を回復させるべく、奥さんや御嬢さんとの歓談の場も設けた。その人間的な環境で K は精進へ固執しながらも、少しずつ打ち解けていく。

そして房州への二人きりの旅先でのこと。あくまでも堅物に見える K に、御嬢さんに恋していた先生は、恋愛や楽しみのある「人間らしい」生活を奨めた。しかしこの時すでに、K は「人間らしい」御嬢さんへの恋が道の妨げになっていることに苦しんでいたに相違ない。それは次の文章に表れている。

『ある時私は突然彼の襟頸(えりくび)を後(うしろ)からぐいと攫(つか)みました。こうして海の中へ突き落したらどうするといって K に聞きました。K は動きませんでした。後向(うしろむき)のまま、丁度好い、遣ってくれと答えました』(第 28 章) ここに恋する自分を滅したい思いが見える。

そして第 30 章で K は、深い意味の日蓮上人を知りたいと住持に会い『精神的に向上心がないものは馬鹿だ』と、精進の道へ戻ろうとする。続く第 31 章では、『君は人間らしいのだ。あるいは人間らし過ぎるかも知れないのだ。けれども口の先だけでは人間らしくないような事をいうのだ。また人間らしくないように振舞おうとするのだ』と言う「先生」に、(難行苦行の人を目指しているのに恋に揺れる)『K は私に、彼がどの位そのために苦しんでいるか解らないのが、如何にも残念だと明言しました』

この第 31 章の「先生」の言葉は、同時に K の言葉でもある。そして K の明言は「先生」の明言でもある。人世で理想の人間になろうと努力する二人。御嬢さんに恋していることを互いに悟らせない二人。互いに悟ってほしいと願っている二人。

そして帰京後、K が御嬢さんに恋しているという「人間らしい」感情を持っていることを告白された先生は戦慄する。そして負の「人間らしさ」を露出する。

K は、「先生」によって物質上の「人間らしい生活」を与えられ、精神的に「人間らしい生活」を推奨され、心の扉を開いた途端、同じ手でその両方を奪われる。そして「先生」は、K の「人間らしい生活」の死によって、物質上で「人間らしい生活」を送りながら、精神上の「人間らしい生活」を永久に失ってしまった。 (2020.9.27)